

クラーク神学館の誕生

— 設計から竣工まで —

**The Construction of the Byron Stone Clarke Hall,
School of Theology, Doshisha University**

本井 康博
Yasuhiro Motoi

キーワード

同志社、クラーク神学館、クラーク記念館、アメリカン・ボード

KEY WORDS

the Doshisha, Byron Stone Clarke Memorial Hall, Byron Stone Clarke,
American Board of Commissioners for Foreign Missions

要旨

同志社神学校の初代神学館、「三十番教室」に続く第2代目神学館は、クラーク神学館である。その設立経緯については、本誌前々号（第70巻第1号）で述べたので、本稿はそれ以降の経緯について、検証する。すなわち設計から竣工に至るまでの消息を明らかにする。

設計者はドイツ人のリヒャルト・ゼール、大工は京都の小嶋佐兵衛である。工事着工、定礎式、竣工式、さらには追加寄附、寄付者への感謝状などについて、J.D. デイヴィスの手紙などを利用して、つぶさに紹介する。さらには、意外にもL.L. ジェーンズの落とす影が見られることにも触れている。

SUMMARY

The Byron Stone Clarke Memorial Hall was the second building constructed for the School of Theology, Doshisha University in Kyoto, Japan. It was built in 1893 through a special gift of \$11,500, which Mr. and Mrs. Byron Clarke donated to the American Board of Commissioners for Foreign Missions. This paper investigates

the details of the hall, as well as the people involved, such as the staff of the Doshisha, the benefactors, the architect, and the carpenters.

リヒャルト・ゼールに設計を依頼

1890年、新島襄の永眠に伴い、記念（紀念）神学館の計画が浮上した。しかし、校友会（同志社卒業生）主軸の募金活動は難航した。目標の5,000円が、思うように集まらず、計画は頓挫寸前であった。

ところが、翌年になって、がぜん、計画は現実味を帯び始めた。ブルックリン市（現ニューヨーク市）のクラーク (B.W.Clarke) 夫妻が、そのために1万ドル（当時の円では約1万3,700円に相当）を寄付すると申し出たからである。

つまり、校友会とはまったく違う方面から思わぬ寄付が舞い込んだのである。校友会や同志社からすれば、「瓢箪からこま」である。これも、アメリカン・ボード (A.B.C.F.M.) のクラーク総主事 (N.G.Clark) の配慮があつてのことである。なぜなら、寄付者はそれ以前、同志社はもちろん、日本のことにはほとんど関心がなかったからである。それに対して、主事はいつも新島、したがって同志社の良き理解者であった。

ところで、寄付者は同志社に対して、3つの条件を出した。その中に、建築費全額（当初は1万ドル）を寄付するので、建物には息子 (B.S.Clarke) の名前をつける、という一項があつた。そのため、それまでの「新島記念神学館」(Neesima Divinity Hall) を建てるという案は、それ以後、「クラーク神学館」(Byron Stone Clarke Theological Hall) 建築計画へと大きく転身を余儀なくされることになった。

さっそく、同志社はクラーク神学館のための建築委員会を立ち上げた。委員は湯浅治郎、中村栄助、ラーネッド (D.W.Learned)、デイヴィス (J.D.Davis) の4名である。前ふたりは、ともに京都のクリスチャン実業家で、同時に同志社社員（理事）であった。後のふたりは、アメリカン・ボード派遣の宣教師で、同志社では外国人教員の中核であった。委員長は不詳であるが、立場上、デイヴィスではなかったか。

なぜなら、建築に関して、活躍が目立つのは湯浅とデイヴィスである。湯浅は、主として業者との交渉や会計面を担当した。アメリカ（アメリカン・ボード）との交渉や、建築家の選定・交渉はデイヴィスの仕事であった。建築家には、ドイツ人のリヒャルト・ゼール (R.Zeel) が指名された。湯浅は教員ではなかったもので、デイヴィス抜きには校内、校外（国外も含めて）とも、重要な交渉は進展しなかったと思われる。

一方のラーネッドは、工事途中（1892年6月）に休暇で帰国したこともあって（後任は、後に見るように小崎弘道）、デイヴィスに比べると活躍は目立たない。

さて、設計を託されたゼールであるが、1854年にドイツのエルバーフェルトに生まれ、長じて建築学を学んだ。1875年にベルリンのエンデ&ベックマン建築事務所（活動期間は、1860年から1896年）に入社する。エンデ（H.Ende）とベックマン（W.Böckmann）は、それぞれ当時のドイツを代表する建築家で、前者は美術アカデミー学長やベルリン工科大学教授、後者は短期だが建築家協会会長を務めている（堀内正昭『明治のお雇い建築家 エンデ&ベックマン』82頁以下、井上書院、1989年）。

彼らが明治政府から招聘され、丸の内洋風化政策などに従事できたのは、政府内のドイツ派の筆頭である青木周蔵や 外務大臣の井上馨の働きが大きかった（同前、172頁）。

この建築事務所のメンバーとして、ゼールも1888年、日本政府から招かれ、お雇い外国人として日本の洋風建築の普及に尽力した。1893年3月に政府との雇用契約が切れるまで、司法省や東京裁判所などの建築を手掛けた。

日本政府との契約が満期終了した後、2年近い空白期間があるが、その間の動向は不明である。1894年12月からは、明治学院に建築顧問教師として雇われ、同院のミラー記念礼拝堂などを設計する。1899年に結婚し、1903年、帰国した。在日中の住居は、明治学院キャンパスでの生活を除いて、横浜居留地であった（堀内正昭・山田利行「リヒャルト・ゼールの経歴ならびに建築について—R.ゼール研究 その1—」347～348頁、『日本建築学会大会学術講演梗概集』2002年8月）。

以上の経歴からすると、1891年にクラーク神学館設計を手掛けたのは、お雇い外国人時代の末期とまさに重なる。来日する前の1880年から1882年まで、彼は故国のドレスデン（旧ダンツィヒ。現在はポーランド）で、西プロイセン州議会議事堂の現場監督を担当している。写真で見る限り、クラーク神学館の外観は、それを簡素にした感がある（『明治のお雇い建築家 エンデ&ベックマン』173頁、213頁）。つまり、ゼールは、10年前の自作品をモデルにしたのであろう。

このゼールは、クラーク神学館を手掛けた後、明治学院に移り住む。同院教授のランデイス（H.M.Landis）との結ぶつきが強かったからと思われる。ランデイスもゼールと同じ年に来日したアメリカ人宣教師である。来日前にベルリン大学に留学し、後にドイツ人女性と結婚するなど、ドイツに関心が深いドイツ員であった。

そればかりか、1890年竣工の明治学院旧神学部教室兼図書館（現記念館）の設計者と伝えられており、「建築に対して極めてすぐれた見識をもち、その生涯を通じて学院内の建物の建築には異常なほど情熱を燃やした」（秋山繁雄『明治人物拾遺集』87

頁、新教出版社、1982年)。

こうした情報は、宣教師サークルという狭い世界では、かなり知りわたった情報であった、と推測できる。したがって、デイヴィスあたりが、人脈を利用して、あるいは神学部教室設計の実績を評価して、ランディス本人に接近し、彼に設計を依頼した可能性も捨てきれない。

さらに他の場で検証したように、W. S. クラークとランディスとは、歳もあまり変わらないので、アメリカで交流があったものと思われる。プリンストン大学の先輩・後輩の間柄だからである。だからこそ、亡き後輩のためにランディスは一肌脱いだはずである。同志社が神学館設計者としてゼールに白羽の矢を立てたのは、このランディスの紹介あってのことであった。

建築へ向けて

さて、10月21日に及んで、いよいよ建築基本案の作成である。校長(社長)の小崎弘道宅で常議員会が開かれ、「神学館新築ノ件」が協議された。「集会場、図書及ヒ博物室、教場」など「総計九室」を想定した。建築場所は、二転三転したと思われるが、最終的に「第一寮、第二寮の跡ニ建築スル事」に決った(「同志社常議員会録事 自明治二十三年四月三日 至明治三十一年七月六日」144頁)。後述もするが、実は地盤不良の土地であった。

翌日(10月22日)の教員会議でも、場所の選定が協議され、前日に決めた予定場所(つまりキャンパス東端)を追認している。すでに設計図、あるいはラフな見取り図や間取りといった建築案が出来ていたようで、1週間にわたって図面や書類を校内で公開し、各自の意見や反応を探ることになった。さらに、先に「新島記念神学館」のために寄付されていた O.H. フリントからの500ドルは、神学館ではなくて、別途5年間にわたって神学書を購入することになった(*Doshisha faculty records*, p.272、同志社社史資料室、2004年)。

その5日後(10月27日)、ラーネッドはボストンの N. G. クラーク(アメリカン・ボード総主事で、1万ドルの寄付を取り次いでくれた功績者)に宛てて、神学館の建築予定地、すなわちキャンパス東端の2つの寮(第一寮と第二寮)を移動させた跡地に建築することを伝えた。

22日の教員会議から1週間を経た10月29日に、再び教員会議が持たれた。この間、公開した建築案について意見を聴取し、基本的な建築案を承認した。スタイルについては、委員会に検討を任すことにし、委員が建築家と協議した結果を今後の教員会議に提示して審議することになった(*Doshisha faculty records*, p.273)。

翌11月の30日になって、かねて校友会から会員に出されていた「新島先生紀念神学館」募金依頼書の通信費、3円42銭の負担をどうするか、という案件が理事会に出された。審議の結果、学校負担となった（「決議書綴 自明治二十四年九月 至同二十五年七月」同志社社史資料センター蔵、A10、4-2、24~25）。この事実は、校友会の資金力が、本来の募金活動（目標は5,000円）に耐えないくらい脆弱であったことを示している。

したがって、「新島紀念神学館」に代わる神学館が建築されることになったのに伴い、校友会による募金活動そのものも打ち切られるか、あるいは、学校の責任に委ねられた可能性が高いと考えられる。しかし、事実は後述するように、そのどちらでもない。

12月11日に及んで、クラーク総主事から同志社教員（アメリカン・ボード宣教師）、スタンフォード（A.W.Stanford）へ手紙（同志社社史資料センター蔵）が寄せられた。ベイカー夫人（E.J.W.Baker）がアメリカン・ボードに寄贈した遺産から6,000ドルを同志社に送金するとの内容である。すでに夏に小崎弘道宛にその使用法について指示があったが、相前後してクラーク夫人から初回分5000ドルの寄付があっただけに、両者は混同されやすい。たとえば、『同志社百年史』（通史編1、140頁、同朋舎、1979年）にある記述、「B・W・クラーク夫妻から、神学館の建築費として六〇〇〇ドルの寄附が同志社になされた」との記述は、明らかにミスである（6,000円、であれば、可能性がないわけではない）。

ちなみに、ベイカー遺産については、ニューヨークの新聞でも報道されている。それによれば、遺産総額は17万8,770ドルに上り、うち6,000ドルが同志社に寄附された、とある（*The New York Times*, Jan. 21, 1891）。

越えて1892年である。年頭早々の1月3日、校友会委員から改めて「新島総長祈念募金」のアピール、具体的には「督促状」ならびに申込書が校友に出された（「諸往復文書綴 自明治二十四年九月 至全二十五年六、七月」同志社社史資料センター蔵、A10-3、M24~25）。

この時点で校友会が、なおも「新島総長祈念募金」活動を続行している点は、どう考えるべきか。神学館建築費については、全額をクラーク家が負担することが、寄付条件として決定、承認されている以上、募金は、建物費以外の用途のため、と推定せざるをえない。

すでに前年8月に、同志社常議員会が校友会に対して、これまでの集金の使途について「照会」したことは、前に見た。さらに社員会（理事会）は、具体的な提案に及んでいる。すなわちこの年（1892年）の3月29日、社員会は次のような決議をした。「新島総長記念館寄付金〔ヲ〕神学館書籍費ニ変更セラレ度キコトヲ校友会へ請求ス

ルコト。但シ、五百円ハ洋書、四百円ハ和漢哲学書」とする（「同志社々員会記録 自明治二十一年一月 至明治二十八年五月」A3-2、M21-28、同志社社史資料センター蔵）。

この時点での校友会による募金が900円であることが、明らかにされている。そのうち約600円（500ドル）が、プリント夫人からのものであることは、言うまでもない。つまり、国内募金は、いまだわずか300円程度であった。

ちなみに、国内募金の額に関して、従来から「寄附金額は不明」とされてきたが（『同志社百年史』通1、631頁）、専用の募金帳簿（同志社社史資料センター蔵）まで保存されていることを思えば、はなはだ理解に苦しむ。帳簿上の募金額は、ほぼ300円前後である。

以上のことは、同志社側の記録「同志社報告 明治二四年度」（778～779頁）でも、大まかではあるが、次のようにまとめられている。筆者は同志社校長の小崎弘道、日付は1892年3月29日である。

- (1) 1891年7月から8月にかけて、クラーク夫妻から病死した子息を記念する神学館建築のために1万ドルの寄付があった。
- (2) そのため、校友会は新島記念神学館建築という当初の募金目的（目標は5,000円）を変更した。そもそもクラーク夫妻の寄付は、校友会の募金そのものが「思はしく」なく、「一同大に心を痛めたる折りしも」の出来事であったために、「大に感謝せざるを得ざる」ところであった。
- (3) プrint夫人が、先に校友会に寄付した500ドルは、神学館の1室に設けられる図書室に備える神学書の購入に充てる。ここに至るまでは、何に振り向けるかを「一定する」のに時間を要した。
- (4) 建築場所は旧第一寮・第二寮の跡とし、工事は来月（4月）早々に着手する。

このうち、(3)について補記すると、現存する「プリント文庫」には、「Flint Memorial Fund」というタイトルが付せられたシールが、一点一点、表紙裏に張られている（例えば、Franklin Carter, *Mark Hopkins*, Houghton, Mifflin and Company, 1892）。

いよいよ着工

1892年4月11日、クラーク総主事への手紙が2通、京都で認められた。1通はスタンフォードが認めたが、文字が判読できない。もう1通はデイヴィスで、設計士（R.ゼール）に関する言及、ならびに工事費増額に伴う寄付の要請がなされている。

「次に先生に特に申し上げたいことがあります。神学館の図面が、ついに用意でき

ました。〔政府から〕高給で雇われ、東京で官庁の建物をいくつか手がけているドイツ人建築家に図面を引いてもらえたのは、幸運なことでした。彼は任された仕事を正当な費用でしてくれましたし、図面はすばらしいです。

もしも手持ちの金銭で神学館を建てることのできるなら、私たちの学校で一番立派な建物になると思います。建築上、第一級の外観をもった建物を建てることは、寄付者の願いを適えることになります。ざっと見積もったところでは、今の予算〔1万ドル〕では図面通りに建物を建てることは、まずもって無理かと懸念しております。

もしも修正が必要なら、いくつかの部分〔特に修飾部分〕を削る必要があると思いますが、そうなれば、建物の外観が台無しになりはせぬかと深刻に懸念しております。建物用地の地盤を固め、工事の準備をするのにおよそ1,000ドルはかかります。

私はこの件を先生に提示いたします。先生がこの事実を寄付者に示し、必要な場合には使用できる500ドルの寄付をさらにしてもらえる機会を彼女〔クラーク夫人〕に与えるのが最善であると判断されるならば、彼女にそれができるようにしていただきたい、と願うからです。

たとえ、余分に500ドルの寄付をいただいても、私たちは予算の枠内で建築するように全力を尽くします。しかし、それは建築上、容易ならぬ節約が必要です。

建物に取り掛かる工事は、できればこの手紙が先生に届く前に着工したいのです。けれども、クラーク夫人の決心が出来しだい、電報を下されば、完成に向かって事を進められるように、建築契約は修正可能なようにしてあります。電文としては、『5』、もしくは、もし必要と判断されて彼女が500ドル以上を捧げてくだされば、10までの他の数字がいいと思います。送られてきた数字だけ仕事ができる、すなわち、数百ドルは図面通りに建物を完成させるのに必要、と判断されたうえ捧げられた、と私たちは理解いたします。

建物西〔正面〕の立面図を同封しますので、クラーク夫人に送ってください。私たちの新しいカレンダーに入れてある図面を、彼女はまだお持ちではありません〕〔〕は、本井による補注。以下同)。

デイヴィスの手紙はここで終わる。設計者のゼール、ならびにミッション窓口のクラーク総主事との交渉は、もっぱらこのデイヴィスが受け持ったことが、判明する。すなわち、以後、クラーク夫人に寄付増額の要請をするのは、もっぱらデイヴィスの責任であった。

デイヴィスの要請が功を奏して、5月17日に開かれたアメリカン・ボード運営委員会で、クラーク総夫人が1,000ドルの追加寄付を行ったことが報告されている(MPC、May 17,1892)。寄付は都合、1万1,000ドルになったわけである。

小嶋佐兵衛

4月末からは、いよいよ建築業者選定である。まず25日から3日間、校内の事務室で新築仕様書、ならびに絵図面を請負人に縦覧させた。入札は10日である。3日後の13日、図書館（現有終館）で、請負人、ならびに小崎弘道、デイヴィス、湯浅治郎、中村栄助という4人の社員（理事であり、建築委員）立合いのもとに、入札箱が開けられた。

応札した業者は全部で10社（企業は2社のみで、あとは京阪の個人大工）である。そのうち、最安値を出した京都の大工、小嶋佐兵衛が11,850円（一説には、11,700円）で受注した。ちなみに最高値は、萩捨次郎の19,000円で、小嶋との差は実に7,150円である（「同志社廿六年度報告」同志社社史資料センター蔵）。

この小嶋は、同志社の近隣に住む町大工である。設計図裏面の書き入れによると、住所は京都市上京区室町通武者小路下ル福良町六番戸で、肩書きは「建築請負人」とある。彼は、すでに彰栄館の工事（1883年着工）にも従事した経験があるという。1889年のハリス理化学館の工事でも、施工を受け持っているのも、早くから同志社に出入りしていたことになる。

工事契約に関して興味深いのは、「日曜日ハ休業スル事」の条項である（同前123頁）。だからであろうか、小嶋は同志社の理事（社員）のひとり（後述する松山高吉か）から、「同志社の仕事を取るには、クリスチャンになったほうがいい」と助言されたという。

そのため心進まぬまま、小嶋は浄土宗から改宗して、キリスト教の洗礼を受けたという。「仕事のため、宗旨まで変えねばならぬとは、えらい世の中になったものだ」と嘆いていたという。しかし、根っからのキリスト教批判者でもなく、娘（ふたりいた）はともに近くのキリスト教（聖公会）系女学校、平安女学院に通わせた。彼女たちの成績は、トップクラスであった（松井全「^{あきら}小嶋佐兵衛について」、同志社社史資料センター蔵）。

ところで、小嶋の入信であるが、1889年5月5日に松山高吉牧師から受洗したという（生島吉造・松井全編『続・同志社歳時記』103頁、同志社大学出版部、1977年）。とすれば、京都の平安教会（組合教会）である。受洗は、ハリス理化学館の新築時期とまさに重なる。

さらに、1896年に平安教会の会堂が新築される際、設計は横田勝治であるが、施工は小嶋が担当している。ふたりともここの教会員である。永眠者名簿の1919年の条にも小嶋の名前が見出せる（『平安教会百年史』48頁、350頁、平安教会、1976年）。

一方、小嶋に授洗した松山牧師であるが、同志社で教鞭を執ったり、社員（理事）

を務めるかたわら、1887年には平安教会の牧師に就任した。のち、1896年に至って平安女学院に移ると同時に聖公会に転宗した。

工事着工、ならびに定礎式

さて、神学館の工事に戻ると、契約書には7月20日に着工すべき、とある（「同志社の近代建築」中、123頁）。それに先立つ6月13日には「神学館建築地確定。直ニ縄張ヲ為ス」と「同志社明治廿六年度報告」は記す。すなわち、第一寮と第二寮を共に（今の）室町キャンパス（同志社予備学校があった）に移転させ、その跡地に神学館を新築しようというのである（「同志社明治二十四年度報告」779頁）。

工事は予定より早く、7月10日に開始された（「同志社廿六年度報告」）。工事は順調に進み、10月頃には石切中と新聞報道された。記事では、いまだ新島の名前が消えず、「新島先生記念神学館」工事とある（『基督教新聞』1892年10月7日）。

募金に関しては、この年11月8日の入金か、国内募金の最後である。卒業生の吉田清太郎が1円を寄付したのを最後に、「記念神学館寄附金払込人名簿」は白紙のままである。つまり、「新島記念神学館」の夢は、ここで完全に立ち消えたことになる。

11月4日には定礎式である（「同志社報告 明治二五年度」783頁）。『基督教新聞』や『福音新報』は、1892年11月18日号で、午前8時開始の「記念神学館」定礎式を報じる。式は小崎弘道校長（社長）が司り、祈祷の後、海老名弾正（日本基督伝道会社長）が演説を披露し、続いて湯浅吉郎（神学校教授で歌人。号は半月）が和歌を朗読した。

さらに聖書を始め、湯浅吉郎の和歌などを小箱一「鉄函」一個（「同志社廿六年度報告」）一に入れて埋めた、と報道する。が、もっと詳細なリストは、設計図裏面に書き込まれている。なんと17品目にも及ぶ（竹内力男「クラーク記念館設計図」47～48頁、『同志社時報』52、同志社、1974年9月、にも列記されている）。参考までに埋蔵された品々を列挙してみる。

『聖書』、「米人クラーク氏寄附金の始末、及び建築の事」、「日本基督伝道会社報告書」、「組合教会一覧表」、「同志社設立の始末」、「同志社大学設立の旨意」、「同志社明治廿四年度報告」、「同志社明治廿四年より同廿五年に至る統計記」、「同志社各学校規則書」、「同志社々員姓名簿」、「同志社教員職員姓名録」、「同志社各学校生徒計算表」、『六合雑誌』、『基督教新聞』、『国民新聞』、『同志社文学雑誌』、J・D・デイヴィス『新島襄伝』。

このうち、紹介に値するのは、「米人クラーク氏寄附金の始末、及び建築の事」である。「同志社廿六年度報告」に、本文が転載されている。この文書は1892年11月4日

付で、名義は建築委員、すなわちデイヴィス、湯浅治郎、中村栄助、小崎弘道の4人である。ここでラーネッドに代わって、小崎が入っているのは、この年6月にラーネッドが2度目の帰国休暇をとっていたからであろう。以下、本文である。

「米国ブルクリン府ノバイロン・ダブリウ・クラーク夫人ハ、本年一月死去セル其子ノ紀念トシテ設立スベキ『バイロン・ストーン・クラーク神学館』ノ為メ、日本、京都、同志社へ米金壹萬弗ノ寄附ヲ為セリ。

東京、明治学院ランデス氏ノ紹介ニヨリ、独逸人ナルセール氏ハ、此建築ノ設計ヲ為シ、本年七月、地盤固メニ着手シ、本日爰ニ定礎式ヲ行ス。日本〔基督〕伝道会社長、海老名弾正氏、演説ヲ為シ、教授、エム・エル・ゴルドン氏〔M.L.Gordon〕、祈祷ヲ献ゲ、社長、小崎弘道、礎石ヲ置ク事ヲ司ル」。

以上である。なお、定礎式で海老名がした演説の中身に関して言えば、日本側の記録では短い新聞報道だけである。「得意の弁で以て、昔日の神学校と今日の神学校とを対比して、以て神学生に一層の注意を促すの演説あり」とある（『福音新報』1892年11月18日）。しかし、これを聞いていたデイヴィスには、極めて不満足な内容であった。デイヴィスは手紙で、その内容を紹介し、慨嘆する。

「海老名氏は定礎式において、集まった聴衆に向かって、新しい建物が古い建物とは違うように、この新しい神学館で教えられるべき神学は、『最初の神学館』であった古くて今にも倒れそうな建物〔三十番教室〕で教えられた神学とは、まったく違ったものであるべきです、などと語りました。私は大変、悲しく思いました」（J.D.Davis to N.G.Clark,Nov.21,1893,Kyoto）。

海老名の演説は、（後述するように）のちに物議を醸し出す点で、問題を孕む内容であった。「昔日の神学校」（初代神学館）で説かれた神学は、あまりにも保守的であるので、「今日の神学校」（クラーク神学館）では現代的な新神学が講じられるべきである、との主張である。

ついで、1893年に入り、3月31日に「同志社年次報告」が出された。そこには、クラーク神学館の建築の件が、次のように盛り込まれた。

「くらるく夫人、其亡児ノ紀念トシテ神学館新築ノ為、金貨壹万弗ヲ寄附シタルコトハ、前年〔1891年〕ノ報告ニ記載シタルガ、其后、直ニ之ガ新築ニ着手シ、六月十三日、縄張ヲ為シ、十一月四日、定礎式ヲ行ヒ、着々歩ヲ進メツ、アルナリ。

今日ノ処、爰ニ七分通りハ出来シタリト云テ可ナリ。工事総費額予算ハ、壹万四千円許ナリシモ、地ナラシノ為メ、模様替ノ為メ、其他種々ノ予算外ノ支出アリテ、費用嵩ミタレバ、今日ノ処、到底壹万弗ヲ以テ竣工ニ至ラシムルコト六ヶ敷カルベシ。

依テ此事情ヲ明カニ申シ送り、寄附者ニ向テ、其増額ヲ依頼シ置キタリ。此事ノ成否、未タ明カナラザルトモ、多分目的ヲ達スルニ至ランコトヲ信ズルナリ。此建築ニ

シテ竣工セバ、校中第一ノ美観タルニ至ラン。

此建築ノ設計ハ、東京明治学院ノらんです氏ノ紹介ニヨリ、専ハラ独逸人ゼーの氏ノ工夫計画ニ依ルモノニシテ、余ハ両氏ノ厚意ヲ以テ我校ノ為ニ尽サレタルノ労ヲ厚ク謝セザルヲ得ザルナリ」(『同志社報告 明治二五年度』783頁)。

ここから判明するように、この時点での進捗状況はおよそ7割の出来上りである。R.ゼールの設計により大きく立ち上がった建物は、「校中第一ノ美観」を呈するという。

一方で、工事費はすでに予算の1万ドル(約1万3,700円)を超え、1万4,000円に上った。家具工事などを計算に入れると、かなりの経費増が見込まれた。

そこで、寄付増額をクラーク夫人に依頼する必要が生じた。「デビス氏より^{くわ}悉く其事情を米国に申送りて、更に金貨一千弗の寄附を受け」た、とある。建築委員、デイヴィスが本領發揮する出番である(『同志社文学』74、36頁、1892年9月)。

工事の消息を伝えるデイヴィスの手紙

さいわい、デイヴィスが3月25日付でクラーク総主事宛に出した手紙(J.D.Davis to N.G.Clark, Mar.25, 1893, Kyoto)に、その間の経緯が詳しく記されている。全文が神学館情報であり、資料として貴重なので、訳出する。

「パイロン・ストーン・クラーク・ホール、とりわけ図面通りにこの建物(正面の立体図は、すでにお送りしました)を完成させるには、おそらく資金がさらに必要であろう、と何カ月か前に私たちは声明を出しました。クラーク夫人が寛大にも応えてくださったことについてお伝えする時期がやって参りました。

工事は去る6月に基礎から始められましたが、すぐに予期せぬ困難に遭遇しました。これまでの建物なら、古井戸を掘るとき以外はすべて、堅い地盤が見つかりました。しかし、今回の建物は全面にわたって3フィートから6フィート、地下を掘ると、軟い^{マール}泥灰土のような層^{ベッド}に突き当たります。おそらく古い湖底でしょうが、深さは6フィートから13フィートあります。

この欠陥を矯正する唯一可能な方法は、ピッチを塗った約1,200本の松の小さな丸太を基礎全体の地下に^{くい}杭として打ち込むことでした。それらは、堅い地盤に着き当たり、それ以上は行けない所まで打ち込まれました。ともかくも適当な建築地点が、ほかに全然見あたりませんでしたから、この地点に建っていた建物[第一寮と第二寮]を移転させるのに、1,000ドルくらい使ってしまいました。

杭の先は溝の底にある土で切断されました。杭の間のすき間すべてを小石で充填するために、小石が杭打ちで打ち込まれました。その上にセメントの基礎を打ちます。

これでおよそ300ドルの予期せぬ出費がかかりました」。

ここで明かされている地盤の悪さは、「建っている土地は、元沼地で、太い松の柱を打ち込み、その上に建っている」というこれまでの伝承（田中良一「同志社の明治建築案内」、同志社本部、1963年）を裏付ける。この伝承はおそらく戦後に補強工事をした際に判明した事実に基づいて、発生したと考えられる。

また、ここで挙げられている経費（総計約1,300ドル）は、これまで知られていた「地所及地盤費 1,502. 円98銭1厘」に相当するものであろう（『同志社文学』74、35頁）。その内訳を言えば、「地所諸費」が1,000円、「地盤杭木打栗石土砂費」502円98銭1厘となる（「建築費額報告書」1893年9月付。湯浅治郎資料 Y-Y J、M26、同志社社史資料センター蔵）。

手紙に戻ると、デイヴィスはついで、ゼールに言及する。これまた、新事実をいくつも含む得がたい証言である。

「それから図面を引いてもらったドイツの建築家ですが、設計料は600ドルはしません。しかし、無料で作成してくれました。この建築家はゼール氏と言いますが、大いにこの建物に関心を示してくれ、去年の12月にはるばる300マイルかなたの東京から、工事や図面を現場で点検するために来てくれました」。

ゼールの設計料は600ドルであるにもかかわらず、無料にしてくれたうえに、現場監督にも駆けつけてくれた、という指摘は看過できない。ゼールの好意と理解から、というべきであろうか。ただし、竣工後の「建築費額報告書」（湯浅治郎資料）では「設計其他諸費雑費」が287円、「工事監督費手当」335円となっている。一旦は辞退した設計料ではあるが、工事監督費同様に、同志社が不十分ではあるが、支払ったものか。

さらに、デイヴィスはゼールの苦心について記述する。

「彼は建物を地震から護り、あらゆる方法で建物を堅牢、かつどっしりとしたものにするために、可能なすべてのことをしてくれました。これまで日本で何十年間も知られなかったような大地震対策として建物全体を強固なものにするために、鉄道レールが使われたり、強度の鉄のタガが、床から床の間に、2階の上に、塔屋の中に、など角から角へ対角線上に渡されました。このことがまた、この面で最初計画していたよりも、200ドルから300ドルくらいの経費増になりました。

節約のために、建物の強固さと美観を損なわない限りのあらゆる可能な方法で細心の注意が払われています。小崎学長と衆議院議員の湯浅氏が、このことについて多くの時間を費やしていますし、私も彼らを助けて、私が持っているすべての思慮と経験を使ってもらうようにしてきました」。

ここでデイヴィスが指摘するように、地震はレンガ建築には弁慶の泣き所であっ

た。日本ほどの地震国でないドイツでは通常使用されない補強金物が、クラーク神学館には多用されたのも、このためである。その好例が鉄道レールである。今回の解体修復工事の過程で、ブレナボン製の鉄道レールが「発見」され、デイヴィス発言の正当性が立証された。ちなみにブレナボン（Blaenavonn）はイギリス産業革命を支えた産業用地で、2000年に世界遺産に指定された。

こうした補強と耐震構造が取り入れられたのも、1891年10月に発生した濃尾地震からまもない、翌年7月から工事に着工されたことが、その理由である。「ゼールはこの地震の被害を目の当たりにし、その翌年に設計したこの同志社クラーク記念館において、耐震構造を積極的に取り入れたのではないか」との推測は（鶴岡典慶「西洋建築の修復を通しての国際交流—重要文化財 同志社クラーク記念館」30頁、『木の建築』16、木の建築フォーラム、2006年12月）、はからずもデイヴィスの証言で正鵠を得ていることが判明した。

さらに経費削減のために小崎が湯浅と共に動いている、というのも貴重な指摘である。小崎は決して名目的な建築委員ではない。デイヴィスの手紙はさらに続く。

「その結果、工事は順調に運び、現在、建物の2階頂上まで進んでいます。2、3か月もすれば、すなわち多分6月までには終了する見込みです。日本において、と言えなければ、京都で断然、最も美しい建物になります。私たちは、これが『永遠に美なる、喜びに満ちたもの』になることを望むと同時に、確信します。

契約した工事は、今のところ最初の寄付、10,000ドル全額に加えて、さらに500ドルばかりを必要とします。それ以外に、色の焼付け、ニスやペンキ塗装、その他こまごまとした出費を賄いません。きちんとやれば、おそらく500ドル近くかかると思います。家具や椅子、本棚、ストーブなどを調達する費用はまったく見ておりません。私は事柄を洗いざらい先生の前に披瀝しました。理事たちが私に、手紙で「先生に」お伝えするようにと依頼した事柄なのですが、私たちに言えることは、次のことです。必要な額は、さらに1,000ドルですが、500ドルあれば、家具工事はひとまず終わられます。余分に1,000ドルありさえすれば、家具工事は十分とは言えないまでも、建物全体を完成させることはできます。私たちに今できることは、現状をありのままお伝えすることです。

これまで述べてきた予期せぬ出費がなければ、家具工事に回すことができる1,000ドルが残るゆとりが出たと思います。クラーク夫人に寄付の追加を頼むのは気が進みません。もし、彼女が実態ならびに必要性から見て、家具のために十分な追加寄付を明確な方法でしたいと思われたら、私たちは喜んで使わせていただきます。もし彼女が、追加の1,000ドルはまったく自分がする義務があると思われたならば、私たちは彼女の寛大な贈り物に感謝の言葉と想いを心から捧げるだけです。そして家具が不十

分な現状でやって行くためにできるだけことはいたします。

敬具

J. D. デイヴィス。

以上が、デイヴィスの手紙の全文である。要は見積り額の増大である。「予期せぬ困難」が次々と発生したために、予算不足になったことは、従来からも（次に示すように）同志社の記録でも言及されてはいたが、具体的な中身はここまで鮮明ではなかった。

「地ナラシノ為メ、模様替ノ為メ、其他種々ノ予算外ノ支出アリテ費用嵩ミタレバ、今日ノ処、到底壹万弗ヲ以テ竣工ニ至ラシムルコト、六ヶ敷カルベシ。依テ此事情ヲ明カニ申シ送り、寄附者ニ向テ其増額ヲ依頼シ置キタリ」（「同志社明治二十五年度報告」783頁）。

竣工、ならびに追加寄附

さて、4月8日には、いよいよ上棟式である。「夏期休業の末に及びて略落成」ともある（「同志社報告 明治二六年度」787頁、『同志社百年史』資料編1）。ただし、なぜか翌月の5月23日のアメリカン・ボード運営委員会では、神学館はすでに竣工したと報告されている。さらに、この席上、クラーク夫人がこれまでの1万1,000ドルのほかに、さらに家具工事のためになお500ドルを追加したことも明らかにされている（MPC, May 23, 1893）。

今度もまた、「デビス氏、之を米国に申送りて、寄附の増額を乞へり」であった（『同志社文学』74、36頁）。クラーク夫人は、すべて自分たちの寄付金で建物を完成させることを条件にした以上、多少の出費（増額）はやむをえない、と判断したのであろうか。

追加寄付が届いたのは7月15日であった。同志社側の記録では、この日、同志社神学校へ「クラルク夫人」から「クラルク神学館建築費増加」として1638円84銭5厘が送金されている（「同志社明治廿六年度報告(II)」同志社社史資料センター蔵）。ただし、デイヴィスはその前日にすでに情報を入手している。その日、クラーク主事に宛てて、「クラーク夫人から追加の1,000ドルの寄付が届いたこと、ならびにそれゆえ、私たちはほっとしたことを喜んで報告させていただきます」と記している（J.D.Davis to N.G.Clark, July 14, 1893, Kyoto）。

7月24日、デイヴィスはさらにクラーク総主事に礼状を送り、6月23日付クラーク総

主事の手紙で寄付のことを知り、「これで助かりました」と礼を述べている (J.D.Davis to N.G.Clark, July 24, 1893, Hieizan)。

けれども、この間の資金不足は明白であった。6月6日にデイヴィスはクラーク総主事に宛てて、再度、追加寄付の依頼をした。もうこれ以上はクラーク夫人には依頼しにくいという状況であったので、他の方面からの寄付を得る方法が考慮され始めている。「依然として神学館の家具工事に必要な資金について言及される、先生のお手紙を拝受いたしました。もし、ストーン [クラーク] 夫人が寄付してくれなければ、この目的のための資金を友人たちから得る努力をしてみよう、と言ってくれる先生のお申し出を感謝します。

建物は、今では経費をはるかに超過しています。したがって、たとえクラーク夫人が約束された1,000ドルの特別寄付をもってしても家具工事に充てる資金が、まったくなくなることは断言できます。先生がコピーして彼女に送っていただいた私の手紙に答えて、彼女が家具工事のために何ほどかを寄付してくださるならば、ありがたく思います。もしそうでなければ、特に先生にご面倒をかけないご友人で、この目的のために300ドルを寄付してくださる方々がおられます。少なくとも多くても、それも結構です」。

ついでデイヴィスは、クラーク総主事の労苦を鑑みて、「私たちは当地でできる限りの最善を尽くして、安い家具を建物に備えます。必要ならばこの目的のために使うことができる信託資金が少々、送られて来ております。ただし、もしもこの家具工事に使う必要がなければ、他の方面に使いたいところです。そこで、これを先生と主なる神に委ねて、神がご自身の方法で取り組んで下さるように祈ります」 (J.D.Davis to N.G.Clark, June 6, 1893, Kyoto)。

さらに、後に見るようにこの翌年 (1894年) に追加寄付が同志社に送られている。つまり、不足額が2度にわたって追加送金されている。この結果、当初の予算、10,000ドルを越える分、1,500ドル (2,568円67銭5厘) もクラーク夫人が負担していることになる (『同志社百年史』通史1、140頁)。

この点に関して、注意すべきは、建築委員 (というより建築会計担当であろう) の湯浅治郎が残したデータである。収入の明細が判明する。それには、第3回までの送金がこう記録されている。

- ① 6,683.495円、
- ② 7,014.892円、
- ③ 1,638.845円、計 15,337.232円。

これに利子 (397.185円) と不用品売却代 (7.140円) が合算され、総入金は15,741.557円となる。これに対して建築費は16,031.981円に上った。差し引き、290.424円の赤字

である。赤字のうち、アメリカン・ボードが200円を立て替え、残りの90,424円を同志社が負担した（「建築費額報告書」）。

アメリカン・ボードが立て替えた分は、もちろんクラーク夫人が後で支払っている。その額は、立て替え分をはるかに超える500ドルである。これが4回目（そして最後）の送金である。入金は1893年2月14日のことで、日本円では929円83銭となる（「同志社明治廿六年度報告(Ⅱ)」A4-1、M26）。

この間の経緯が多少、複雑であることが、デイヴィスの手紙（J.D.Davis to N.G.Clark, Nov. 21, 1893, Kyoto）からも判明する。

「神学館の写真を何枚か同封いたします。少なくとも2枚をクラーク夫人に送ってください。私たちは、家具工事の代金を私たちの私的資金から前払いしました。年末までにさらに5,000ドルを送る、とのクラーク夫人の約束を信じてのことです」。

「私たちの私的資金」とは、ミッション会計である。そこからさし当たって200円を仮払いした。その後、クラーク夫人の約束が実行され、補填されたことは、言うまでもない。

彼女からの寄付金総額は1万6,266円26銭2厘となる。さらにこれに利息が加わる。これに対して支払いは、1万6,031円98銭1厘であった（『同志社文学』74、35頁）。「全額負担で建築」という寄付者の当初の約束は、立派に守られたばかりか、200円を越える余剰さえ出ている。同志社の側では、500ドルの追加寄付が実現すれば、「前の不足を支弁したる上、少くも四、五円は将来の修繕費に供するを得可し」と踏んでいたが（『同志社文学』74、36頁）、4、5円どころか、当初見込みを大幅に上回る余剰金が出たことになる。

工事終了と竣工式

さて、建築工事に戻ると、建物は、1892年の夏休みの末にはほぼ落成し、さっそく9月の新学期（第1学期である）から授業に利用された（「同志社報告 明治二六年度」787頁）。詳しく言えば、9月10日に工事は終了した（「建築費額報告書」）。契約書では、7月19日までに工事が終了しない場合は、1週間につき60円の違約金を課す、とあったので（「同志社の近代建築」中、122頁）、主要工事は夏休み中に終えていたはずである。

9月19日から、神学校本科・別科の授業が新しい教室で始まった（「クラーク記念館設計図」46頁）。もちろん授業以外にも利用される。最初の催物は、講演会である。1893年11月22日の夜6時から「神学講義会」が神学館（2階の講堂であろう）で開催され、大島正健が「^{いのり}祈祷」という講演を披露した（『基督教新聞』1893年12月1日）。こ

の大島は、周知の「札幌バンド」の一員で、新島襄との交遊から、新島の死後、札幌農学校から同志社に転出した。この夏に急死したG.C.フォーク（G.C.Foulk）の後任である（「同志社常議員会録事 自明治二十三年四月三日 至明治三十一年七月六日」147頁）。

この年も押し詰まった12月13日の朝、休暇で帰米していたラーネッドが復職した。彼は帰国したその日にボストンのクラーク総主事に無事に京都に戻ったことを報告した。その手紙には、神学館が立派に竣工していた、ともある。建築委員であったにもかかわらず、後半は不在であったので、日本ミッション（京都ステーション）、さらには同志社を代表して建築工事に当たったのは、彼ではなく、デイヴィスであったことになる。

クラーク神学館が、正式に開館するのは、1894年1月30日のことである。開館式（献堂式）は、午後1時に同志社チャペルで挙行された。校長の小崎は渡米中のため、校長代理の市原盛宏を始めスタッフや来賓が多数、出席した。式典では「本館の建築に関して、初より大に尽力せられたる」湯浅治郎が、工事の経過報告を担当した（「同志社報告 明治二六年度」788頁）。日本人の建築委員では、湯浅が中軸であることが、判明する。夕方の6時から、会場を神学館に移して、懇親会である（「クラーク記念館設計図」47頁）。

ジェーンズの落とす影

ところで、竣工式に関してデイヴィスはある不安を抱いていた。定礎式における海老名演説の再現を恐れたのである。当時、横井時雄を始め、有力なキリスト教指導者に育っていた「熊本バンド」は、総じて伝統的な保守神学に代えて、新神学になびいていた。

デイヴィスは言う。「献堂式に関して、私は固く沈黙を守っています。横井氏が渡米してくれ、少なくとも彼に演説を依頼することができないようになってほしいと望んでいます」。定礎式の海老名演説を思い返すと、「献堂式をもつことにとっても意欲が湧きません。横井氏が現在、書いたり、話したりしている種類の神学やキリスト教に神学館を捧げたくはありません。前に申しましたように、私はこの式典をこれまで[会議の議題に]持ち出したことがありません。少なくとも横井氏が招待される範囲外に行ってくれるのを望むからです」（J.D.Davis to N.G.Clark,Nov.21,1893,Kyoto）。

この時点で、横井にはすでにイェール大学へ留学する話が進んでいたのであろうか。デイヴィスにとっては、新神学の旗手ともいべき人物は、同志社の周辺から、少なくとも竣工式の時点だけでも消えて欲しかった。実際、事はデイヴィスが望んだ

方向に進みそうであった。

竣工式は、デイヴィスの手紙から2カ月後のことであった。デイヴィスは、「懸念はひとまず消えた」と手紙で安堵する。

「神学館の献堂式に関して、次のことをお伝えできるのは、うれしいことです。ついに日程が決定しました。1月30日に宮川〔経輝〕氏とアルブレヒト氏(G.E.Albrecht)が演説をすることになりました。熊本バンドの側に、現在、新島〔襄〕氏に対する悪感情(the feeling of disparagement)があることを考慮しますと、式典を新島氏の生涯と人格をあまり強調する機会とすることは、賢明ではないだろうと思います。もっとも私が演説するとしたら、大いにするだろうとは思いますが」(J.D.Davis to N.G.Clark,Jan.20,1894,Kyoto)。

新島に対する「悪感情」が何に起因するのか、にわかに計りがたいが、あるいは、神学的な見解の差異が要因か。一方、デイヴィスもほぼ同様の立場に置かれていた。それは彼自身が、熟知する。

デイヴィスの不安を理解するには、当時、彼がジェーンズ(LL.Lanes)を間に挟んで、熊本バンドと敵対的な関係にあったという事実を把握する必要がある。

とりわけ1893年秋には、当のジェーンズが再来日し、京都に現れたばかりか、なんと同志社チャペルで連続講演をするという事態にまで発展した(詳しくは拙著『敢えて風雪を侵して』150頁以下、思文閣出版、2007年、を参照)。それにしても、新島の名は、神学館そのものから消えただけでなく、竣工式の晴れの場でも称賛するのが憚られるような、影が薄い存在になるとは、何と言う皮肉なことか。

館名に関して補足すると、英文の正式名称は、クラーク夫妻の寄付に伴う条件から、子息の名前にちなんで、Byron Stone Clarke Memorial Hallと命名された。日本語では「クラーク記念神学館」とか、「久良留久神学館」、あるいは単に「神学館」と呼ばれた。

ボストンのクラーク総主事も、もちろんデイヴィスや亡き新島が直面する事態を正しく把握していた。デイヴィスの手紙によれば、折り返し、次のような助言が送られて来た。

「新島氏などに言及しながら、神学館の献堂礼拝のトーンに関して助言してください。さった〔クラーク先生の〕お手紙を受理するや、ただちに私はそれを〔演説予定者の〕アルブレヒト氏に送りました。先生の主張は、私たちが献堂式の件についてあれこれ考えている時、私が神学校のスタッフに強い調子で行なったスピーチとまさに同じ色調です。

私はこう力説しました。この式典は、大いに靈的に高揚する機会とすべきであって、参加する牧師や伝道師、さらには私たちに注目し、同志社や組合教会の正当性に

大きな疑いを抱いている他の教会やミッション、それに私たちのミッションに再び安心感を抱かせる機会とすべきです」(J.D.Davis to N.G.Clark, Feb.5, 1894, Kyoto)。

この竣工式については、新聞はさすがにその消息を詳しく報じている(『基督教新聞』1894年2月9日)。式典の様子は、同志社側の人間からも発信された。すなわち「雷軒」という筆名(松浦政泰であろう)で「同志社神学館の落成」という記事が新聞に出た。文中、開館式の招待状の文言も紹介されている(『基督教新聞』1894年2月2日)。

クラーク夫人への感謝状

続いて、2月5日にはデイヴィスが(クラーク総主事を通して)クラーク夫人へ式典の報告をした。「式典に私は大変失望しました」とある。アルプレヒトの演説もそうであるが、宮川は30分間、聖書の各書を「切りまくった」(cut and slashed)。結論部分で霊的な真理や生活に根ざす点を強調したことは、大いに評価できるとしても、新島と彼の業績への言及は一切なかった。デイヴィスだけが、やっと祈祷の中で新島に触れた程度で終わった。

夜の懇親会の演説は、昼に比べると、まだ救われた。それでも、デイヴィスが期待したような霊的な高揚は見られなかった。遠くから参加したある日本人伝道師も、翌朝、デイヴィス夫人に「霊的な高揚を期待して来たのに、かえって引きずり下ろされた」と悲しそうに語ったという(J.D.Davis to N.G.Clark, Feb.5, 1894, Kyoto)。

15日には、同志社神学校校長代理の市原盛宏からクラーク夫人に礼状が贈られた(「諸往復文書綴 自明治二十六年九月 至同二十七年七月」同志社社史資料センター蔵、A10-3、M26~27)。これまで未発表であるので、全文を紹介する(読み下しについては、本学人文科学研究所職員、竹内くみ子さんの協力を得た)。

拜白、御愛子記念のため神学館建築費として金貨壹萬壺千五百弗、本社へ御寄附被成下、就ては御指定の目的に従ひ、早々工事に着手罷在候処、茲に全く其工を竣へ、去月三十日をトして、開館の式を挙致し候。

抑も本館の結構は、最も壯麗にして、一層本社構内の風致を相増し申候。加之、目下本館に出入する神学生徒は六十余名も之有、日々聖書及神学等の諸科を専攻致し居彼等は、将来我国伝道の志望を抱き居候ものに御座候得共、漸次我神学校の隆盛なるに随ひ、貴下が愛児記念のために御寄付被下候御厚意の程は、本館と共に永く彼らを始め、我邦人の記憶に存すべきものと奉存候。

先は此度、工事落成の御報告を兼ね、右御礼まで、謹んで戴寸楮候 匆々不尽。

明治廿七年二月十五日

クラルク夫人殿台下

同志社神学校長代理

市原盛宏 〔印〕

これには、下書きが残されている。両者には大きな差異はない。ただ「茲に全く其工を竣へ」の前にあった「殆んど一ヶ年半の歳月を経て」が、なぜか省略されている。なお、アメリカに送られたはずの英訳文書は、下書き共々、保存されていない。

さて、クラーク神学館は、1963年の春、築70年を迎えた。この時、新しい神学館（3代目。現行の神学館）が竣工したのを契機に、神学教育の拠点である役割を閉じた。以後、「クラーク記念館」と改称され、「余生」を送ることになったが、現在にいたるまで一貫して「同志社のシンボル」であり続けている。

注

本稿は、同志社大学神学部・神学研究科主催の講演会（2008年3月8日、クラーク・チャペル）で行なった講演「三代神学館をめぐる秘話—クラーク記念館竣工に寄せて—」の一部に加筆して、論文に仕立てたものである。

設計に至るまでの寄附消息や建築家の選出などの経緯については、本誌第70巻第1号（2008年6月27日刊）の拙稿「同志社神学館の変遷—三十番教室からクラーク神学館へ—」で分析を終えている。

さらに、新たに入手したB・S・クラークの写真やデータについては、拙稿「B・S・クラークとは誰か—クラーク記念館の新資料紹介」（本誌第70巻第2号、2008年12月8日刊）をご覧ください。